口語詩句投稿サイト72ｈ

ことばの力詩集

2026年9月　第71号

口語詩句投稿サイト72h



ことばの力詩集

2026年9月　第71号

選者

暮田真名（川柳人） 3
小島なお（歌人） 10
杉本真維子（詩人） 16
高橋修宏（俳人・詩人） 23
立花　開（歌人） 30
西躰かずよし（俳人） 38
林　桂（俳人） 47
龍　秀美（詩人） 58

暮田真名　選

盛武虹色（京都府）

あまりにもさみしいばかり
言っていて
舌の先から
ちょうちょうになる

作歌意図からは外れるかもしれないが、下句を読んで思うのは、ストロー状の蝶の口のことである。花の蜜を吸うためのその形状に、歌の主体の舌がなっていくようだ。相互のコミュニケーションのための舌ではなく、一方的に吸うための舌に。

佐藤橙（鹿児島県）

引っ越せば遠くなるのは
知っていてでもわかっては
いなかった　海

知識として知っていることと、体験して身に染みることの違い。海は、実際に海を隔てた場所に引っ越したのでもいいが、距離を思わせる道具立てとして読めるだろう。抑揚の少ない文体も、凪いだ海を思わせる。

小林セオ（千葉県）

藤棚にいちばん近い君の家

もし、君の家の庭に藤棚があるのであれば、一番近い

のは当然だ。当たり前じゃない？と思わせるからこそ、「藤棚のすぐそばにはいつもきみの家がある」とでも言われているのではないか、という裏読みに読者を誘う。

荻野ひる（埼玉県）

花びらが薔薇より多いランドセル

中七かで切れていると読むことも不可能ではないが、ランドセルが一輪の花のように捉えられていると読むのが自然か。背負われている状態ではなく、背負う面を地面に置いている状態のランドセルだろう。赤い皮が、薔薇の肉厚な花びらに重ねられる。

春野隙間（北海道）

その男　少女の足が好きだった
そしてベッドを作って死んだ

少女とベッドの共通点は、足（脚）があるところか。女性をモノ化しているという謗りもあるだろうが、少女そのものではなく足、足そのものではなくベッド、と、「そのもの」からどんどん遠ざかる、フェティッシュのおかしみがある。

小林セオ（千葉県）

全神経・全ポメラニアンに羽

ネットではなにかと「ドーパミン」が取り沙汰されているが、神経に羽が生えるとはまさにそれではないか。

そのうえポメラニアンにも羽が生えており、白くてふわふわした空気をさらに増幅させている。

檜野美果子（宮城県）

八月の上昇だけのエレベーター

エレベーターは往復によって乗客を運んでいるわけだから、「上昇だけ」は一場面を切り取っていることになる。八月という季節からも、死者が天にのぼること、火葬場の煙のようなものにまで連想がおよぶ。

たか（宮城県）

冷蔵庫を開けると
家族の途中が
明るくなる

「途中」とは、はじまりとおわりのあいだのこと。つまりこの句は、家族にははじまりもおわりもあると言っている。誕生、結婚、あるいは死。しかし、いまはまだ途中である。庫内灯が、毎日の暮らしを照らす。

塩本抄（石川県）

柔らかさを
今日はわたしに使いきる
全部がもちのもちが好きだよ

上句は、主体が日頃ケア労働に従事していることを匂わせる。「全部がもちのもち」とは、あんこが入っていたり、くるみが練り込まれていたりしない、純粋な（？）もちのことか。あんこやくるみを受け入れると

き、もちの身体は引き裂かれていたのだ。

サバの空似（山形県）

海岸が１６００に割れている

「２つに割れる」ならパカッと左右に割れるところが想像できるが、「１６００に割れ」たら、粉々ではないか。「１６００」を、どう数えたのだろう。童謡『ふしぎなポケット』のように、数えながら割っていったという可能性もある。

小島なお　選

髙橋泰地（愛媛県）

真夏日に知覚過敏の君といるセキセイインコが籠を噛む音

真夏日の陽射しもインコの鮮やかな体色も、嘴で籠を噛む音も。すべてが多方向から君の過敏になっている知覚をきりきりと刺すよう。極彩色の痛み。

猪山鉱一（神奈川県）

砂粒のひとつひとつに担当者

海辺の、砂場の、川沿いの無数の砂に担当者が付く世界線。あらゆる責任の所在を明らかにしておかなければいけない時代への皮肉ともとれる批評性。

坪智也（北海道）

死にかけの音楽を聴く校舎裏

吹奏楽部や軽音学部の弾く切れ切れの音楽が校舎裏には響いていた記憶がある。あるいは校舎裏という場所に集う者たちの喩的な象徴としても惹かれる。

青野朔（東京都）

追い焚きの
あたためられた湯がうねる
マーブル模様のままいたかった

温度の下がった湯と混じり合う追い焚きの湯。そのように自身の内面にいくつも渦巻く感情のまだらがやがてひとつの思いに均されてしまうのは寂しい。

軽居とどめ（東京都）

煌々と照らす私じゃない発明

トーマス・エジソンは私ではないし、電気を発明したのも私ではない。見知らぬ誰かの人生が不意に、かつ当然に私の人生に介入していることへの不如意。

立田渓（兵庫県）

すりガラス越しに遊ぼう戦時中

ガラスの向こうに薄ぼんやりと見えている輪郭。相手

が手を当てれば、こちらも手を重ねて。向こう側が見えないからかりそめの安寧に身を置くことができる。

灰島りんこ（東京都）

百合の根に埋めた一九六八年
知らない森が雪を始める

「一九六八年」に何が託されていたのか。埋めた年を覆う土と、その上に降るふかぶかとした森の雪。具体と抽象のあわいに歳月というものの手触りがある。

春野隙間（北海道）

包丁や
閉じ込められた
欠けた茶碗
しみじみしちゃって
ごめんなさいね

包丁にも茶碗にも人の生活の痕跡が宿る。長く使われていなかったものなのかもしれない。家じまいの気配に「しちゃって」「ね」の軽さと親しさが馴染む。

いよは（京都府）

租庸調　私の調は　このセーター

律令制の税制度で租は米、庸は労働、調は特産物を納めたという。納められるものの少ない私が、きっと差し出すことになる大事な、ありふれたこのセーター。

種子田空里（東京都）

会わない日の
皮膚のなかで
だれかが
ひき肉をこねくりまわす

会わない日の皮膚は会えた日のことを反芻している。胸や脳でなく肌が覚えているのはおそらく触れ合った記憶。こねくりまわして会いたさは募ってゆく。

杉本真維子　選

yohei（東京都）

昔々、戦争がまだあるところに

ちいさなことば。でも未来の枕詞。こんなふうに言える日をすなおに夢見させる。

睦月雪花（愛知県）

友だちの友だちは
友だちじゃない
丁字路に紫陽花のひしめく

紫陽花が道の行き止まりにひしめくように咲いている。どこにもひろがらないし、つながらない。でも、だからこそ、自由にのびのびと咲いている。その濃密な美しさに、作者は人と人のつながりの真理を見ているのかもしれない。それは簡単にはつながらないからこそ、価値がある。ＳＮＳなどの安易な「友だち」に惑わされてはいけないのだと。

金井晶（宮城県）

海面は温かいから言葉だけ、音だけ積もる冬の堤防

冬の堤防が詳細に描かれている。言葉だけ、音だけ、というのは声を示唆しているのだろうか。温かい海面

と、そこに積もる声。だれかと冬の堤防にたたずんでいる人の温かい心が灯っている。

常田瑛子（山口県）

クレジットカードで月の土地を買うたびに〈消えたい〉が薄くなった

書かれているままに、クレジットカードで月の土地を買うことを想像してみる。アラふしぎ、たしかに「〈消えたい〉が薄くなった」という実感を覚える。無名の感情に言葉を与えているのか、言葉で感情をつくっているのか。

川瀬十萠子（茨城県）

七月の水まろやかな洗顔に
孵してみたい眼球ふたつ

水生生物と眼球を重ねるという異能の感受性。とろっとした瑞々しいそれは、何を見るのだろう。

まちのあき（宮城県）

ほうせんか
われて
ふぐうなふうりんのように
ガラスは
火からうまれて

「ふぐうなふうりん」という魅力的な音韻。きわめて緩やかな行間の接続が詩を生んでいる。

春蜜柑（群馬県）

バナナ剥かない方の　片手に垂れる皮

手首あたりに感じる、あの異質な皮の感触を、よく見つけてくれたなあと感心した。日常のなかの小さな違和感を巧みに掬い上げている。

荻野ひる（埼玉県）

蟻塚に風が吹き抜け「王」と鳴る

「「王」と鳴る」が素晴らしい。言葉の風格とユーモア

のバランスが絶妙だ。

中原紘（山口県）

白桃が生き物だったらどうしよう
果汁こんなに溢しつつ剥く

果物は、生と死の中間にあるのだろう。木から捥がれた瞬間に生き物から物へと変わるともいえるが、あふれる果汁が、それがまだ生き物であることを主張する。あらゆるものはこちらがうろたえるほどに生きている、ということに改めて気づかされる。

大月陽星（茨城県）

富士の眼帯外す実際おれも

「おれ」から富士へと一気につながる大胆な画角が見事だ。

仁志周（愛知県）

なにもないことがしあわせ
翌朝の始発電車に向かう足どり

ない、こと。その身軽さのために、荷物は背負われるのかもしれない。生から解放されるために生きているともいえるだろうか。

次回も楽しみにお待ちしています。

高橋修宏　選

田崎森太（神奈川県）

Y字路を日傘の迷ふマクガフィン

「マクガフィン」とは、映画や小説などのストーリーにおけるプロットのひとつ。なかでもサスペンス映画の巨匠A・ヒッチコックは、その作劇術において、しばしば言及している。この句では、「Y字路」という選択の迫られるシチュエーションにおいて、「日傘の迷ふ」ことは記されるものの、その理由は明かされていない。「マクガフィン」も宙吊りのまま……。

安野まる（神奈川県）

悪夢っていつでも水族館なのね

このように書かれてしまうと、たしかに「悪夢」とは薄暗く、現実とは異なる場面であることが多い気がする。「水族館」という場所のイメージも、「悪夢」という言葉によって暗転してゆく。

猪山鉱一（神奈川県）

素足から裸足になった夏休み

「素足」も、「裸足」も辞書的な意味合いにおいては大差がない。しかし、「裸足」と書くことで、どこか生々しい「夏休み」の身体的なイメージが現前するようだ。

川端暖（埼玉県）

おはようございます、
後ろに倒します

美容室か、あるいは歯科医院のシーンなのか。何げない日常の場面の会話、その一瞬だけを切り取ることで生まれる、どこか不条理とも呼べる言葉のやり取り——。われわれの生きる日常とは、そんな不思議に満ちているのかもしれない。

夏山栞（東京都）

いきるとは爪先を死へ向けること
あるいはビアガーデンの夕風

やはり、一行目「爪先を死へ向けること」が秀逸。われわれが「いきる」ことの普遍にまで触れている。そして二行目の、「ビアガーデンの夕風」のような安寧と釣り合うように、われわれは「いきる」のだろう。

古橋紗弓（愛知県）

おいでよと呼ばれて
一歩
踏み出せば
風がとおってこんな景色が

何げないワンシーンのようでありながら、「一歩／踏み出」すことのもたらす豊かさ、広やかさにまで届い

ている。「風」が通るだけで景色が変わる、気分が変わる。ささやかな希望をもたらすような一作。

曽我門出（新潟県）

台風でも仕舞わなかった風鈴に
大家族みたいな悪意はあった

二行目「大家族みたいな悪意」に注目した。「風鈴」は、やかましく鳴りつづけたのだろうか。執拗に、何かを訴えつづけたのだろうか。ささやかな季節の風物のひとつが、ある気象によって変貌する、大家族のように――。

秀島由里子（広島県）

朝顔を見届けたから二度寝する

そう言えば、評者自身にも、そんなことがあった。「朝顔」が美しく開花したことを確かめ、ふたたび眠ってしまったのだ。そんな「二度寝」は、浅い眠りにも拘らず、どこか不思議と満たされていた。

ニイナ（海外）

すこしだけ魚のように眠る君
隙間をあけておくからおいで

一行目「すこしだけ魚のように眠る君」とは、誰なのだろう。幼い子どもか、子猫などの小さなペットだろうか。結びに置かれた「おいで」の呼びかけが、限りなく優しく響く。

奥井健太（滋賀県）

バス停以外なにもない暑さです

どこか、映画のオープニングショットのような場面。背後には森も林もない、山や海も見えない。陽光に照らされた「バス停」だけが、ひときわ、その日の「暑さ」を強調する。

立花開選

Kamome（京都府）

トロンボーンは深いの向日葵に似て

向日葵の深さ、トロンボーンの深さ。作者にだけ見える深さがあった。方向は伏せられた深度。どこに向かうのだろうか。向日葵の明るさは時に暗さのメタファーにもなる。トロンボーンは如何に。

クイスケ（栃木県）

五匹の犬がパパ活で食う

命を飼うとは、愛ある贅沢な行為だ。食費・医療費・その他諸々、余裕がないと用意できないがこの命のために生きる価値さえ生まれる。傍にいるために自分を売る。そんなことを知らない犬たちは無邪気に飼い主の帰りを待つのだろう。

小笠原快（東京都）

丸の内の階段
いくら駆け降りても春

青春を謳歌する清々しい姿。駆け降りる勢いに桜の花びらがさらに舞い上がるよう。よく見る情景ではあるが、「丸の内」という固有名詞を入れたことで作者の唯一の空間となったこと、今後も見ていきたいと思い

選出した。

小野寺里穂（神奈川県）

丁寧に来世をなぞる鳩の群れ

平和の象徴である鳩。自由気ままに見える飛翔が私たちには感じられない来世の命を辿っていた。どんな姿に生まれるのか、鳩にも分からないのかもしれない。けれど目の前の来世の存在に触れるように飛んでいく。

林淳（大阪府）

ひとん家の犬畜生に吹くはやて

上裸の禿げも走るあかつき

渡り舟（埼玉県）

「はやて・あかつき」と重厚な言葉と相反する「犬畜生・上裸の禿げ」が混在する面白さがたまらない。平和な情景を詠いたいのに隠しきれない口の悪さに気が付かない不器用さと一生懸命が可愛らしい。

家路への　最終にみた　世の広さ

「最終」の意味をどう捉えるか読み手に問いかけている。帰宅時、ふいに振り返って見た街の美しさにも受け取れるし、生家を離れる際、家路へ向かう最後の道で眺めた街に今までとその先を感じたのか。「広さ」という言葉に込められた広さ。

石村まい（兵庫県）

ほんとうに救いたいなら
火をつけた理性で
鍵穴まで来てくれる？

中途半端な覚悟で手を出してはいけない。途中で手放される救いは、残酷だ。理性も熱も持ちながら。一見贅沢な要求にも見えるかもしれないが、救うとは本来そういうもの。思いを「火をつけた理性」、心を「鍵穴」と喩えた表現が秀逸だ。

種子田空里（東京都）

会わない日の
皮膚のなかで
だれかが
ひき肉をこねくりまわす

不安、孤独、苛立ち。そんな感情は、人間を人間の姿のままで簡単に〝中身〟を変えてしまう。「ひき肉」とは、すでに細かく刻んである。作者の中身は、もうそのものの姿ではないのだ。なのにまだこねくりまわされる。

高橋瑞希（東京都）

走れば忘れることなんて思い出すな

シンプルな感情で生きる。わかっていてもできないものだ。思い出すな、と考えているときこそ事柄に深く囚われる。走りながら感じている、苦しさを原動力にした疾走感がある。

奥井健太（滋賀県）

バス停以外なにもない暑さです

暑さをバス停と同等の物質として捉えている面白さ。「暑さ」が物だった場合の想像を完全に読者に投げており、その雑さも暑さに対しての苛立ちを感じさせる。

バス停以外何もない空間に暑さが満ちてゆく。

西躰かずよし　選

ちねんひなた（東京都）

廃訳の海に眠った
少しずつあなたが海でわかること

廃訳という聞きなれないことばからはじまる。その海に眠るのが語り手なのか、あなたなのか。それとも同じなのか。あいまいなままに置かれる。ただ海でわかる少しずつのことが、あなたへと開かれる。

石村まい（兵庫県）

ひらがなの世界に
うまれなおしたら
清涼飲料水のみずうみ

「うまれなおしたら」の一節に含まれる屈折。もう一度うまれるのでもなく、うまれ変わるのでもない。ボタンの掛け違えのような瞬間。ひらがなの世界は、あこがれを表すのだろうか。みずうみは救いであっても、清涼飲料水という商品でしかない。そこに漂うしずかな閉塞感。

まちのあき（宮城県）

補助線は引かれて
いって
それからは
剥がれたままのひろい
かさぶた

通常なら解法へと誘う補助線がかさぶたになる。「それからは」という接続詞からは諦念が感じられる。長く引かれた補助線の終着点のような。癒えることのない傷跡のような。それでも作品が陰湿にならないのは、それが客観的な描写で成り立っているからだろう。

白馬（静岡県）

水鳥の切り取り線
みずうみのかたち
指で触れてみて
すこし噛むから

水鳥が水を切っているところをイメージしたものだろうか。それが、みずうみの輪郭をかたちづくるように見える。「指で触れてみて／すこし噛むから」という一節から、語り手の求める行為が映し出される。そこにあるのは、痛みを感じなければリアルを実感できないという、生のありようかもしれない。

常田瑛子（山口県）

トンネルを
潜るあいだに間引かれた
夏の光を向日葵と呼ぶ

間引かれたものとして向日葵を見るまなざしに惹かれる。それがトンネルを潜る間に間引かれた夏の光という具体性を帯びる。何故間引かれなければならなかったのか。何故向日葵でなければならなかったのか。その理由のなさに惹かれる。

滝春子（京都府）

夏の果て、私は確かにここにいて
出航の感じで話し始める

話し始めの一歩の難しさ。それだけのことなのに。あたりまえのことがあたりまえでなくなってしまう。夏の果てで語り手はただ一艘の船になる。

春蜜柑（群馬県）

マウンドで話してバッテリーの夏

実際のバッテリーの夏は、マウンド以外の場所が大半を占めるに違いない。けれども、あえてそのシーンをバッテリーの夏と言い切ることで、そこにすべてを賭けたことが伝わる。マウンドに立つふたりがまぶしい。

青野朔（東京都）

はつなつの・真夏の・晩夏の
ワンピース
夏のかたちは円だと思う

いろいろな夏がワンピースになる。はつなつ、真夏、晩夏。
それら、ぜんぶのかたちを、円だと思う語り手。そこに
すべての夏が生まれる。

松浦やも（東京都）

ほおづえをする
ふりをして
手のひらにのこる
シャボンの匂いをかいだ

匂いをかぐのは恥ずかしい。それは恋に似た感情を思い起こさせるからだろうか。「ほおづえをする／ふりをして」という行為が、語り手の感情を伝える。さわやかな風のように。

磨綺（群馬県）

オレンジの明かり他人の家の色

他人の家の明かりをオレンジにしたのは、とおい国の人のぬくもりを想起するのと同じような気持ちからだったのだろう。その家の色が、希望にもあこがれにもなる。それぞれのオレンジにかけがえのなさが宿る。

たか（宮城県）

冷蔵庫を開けると
家族の途中が
明るくなる

「家族の途中」という一節。家族の、これまでとこれから。それは与えられたものではない。途中まで幾度となく積みあげてきたもの。そしてこれからも積みあがるであろうもの。そこにこぼれる冷蔵庫の明かり。

林桂 選

鈴蘭（新潟県）

スポンジは　まだ固いまま
「ちゃんと食べてるよ」
と送った夜

独立して生活を始めた子どもに、親が最初に心配することは、ちゃんと食事をしているか、生活の心配である。心配する親への返答が、「ちゃんと食べてるよ」なのであろう。一方、「スポンジは　まだ固いまま」は、自炊の食器を洗っていないさまの描写だろう。自炊は

ままならぬが、学食や外食、コンビニ食で「ちゃんと食べてる」のだろう。親の「ちゃんと」の意味と違っているのは、承知の上の返事だろう。

垂々（埼玉県）

昨日より一乗車口番号分
海岸寄りで待つ高崎線

「海岸寄りで待つ高崎線」を読んだときに、内陸を走る高崎線を、作者は知らないのだろうかと思った。総評を書く段階で、作者が埼玉の人と知った。高崎線利用者だ。通学、通勤で偶然乗り合わせる気になる人の乗車位置に合わせて乗車する。心密かな楽しみのようなものだ。「一乗車口番号分海岸寄り」は、その密か

な楽しみの帳尻あわせの位置だろう。しかし、どうしたら内陸の「高崎線」に「海岸寄り」の場所があるだろうか。これも心密かな認識の楽しみのひとつと考えるべきなのかもしれない。大きなスケールの地図を頭の中で描かないと、「海岸寄り」は見えてこない。

小武頼子（京都府）

お砂糖もミルクもなしに
空いた手で
君が時折り混ぜる珈琲

ブラックコーヒー愛飲者。砂糖もミルクも入れずに飲むのだが、スプーンでコーヒーを混ぜるのが、「君」の癖なのだろう。「空いた手で」が不思議だ。つまり、

一方に、空いていない手があるということだ。携帯を操作しているか、本を読んでいるか。「君」の意識は、コーヒーの手ではなく、もう一方の手にある。コーヒーの手は殆ど無意識の所作である。「作者」の目は、その無意識の手に注がれている。

赤城条治（埼玉県）

錆びついた箱の中には
サイダーの
こぼれた跡のやうに
夜です

金光舞（埼玉県）

羽化の蝉左右均しく翅ひらく

「夜です」が主題。「サイダーの／こぼれた跡のやうに」は、主題の「夜」の有り様をたとえている。一行空きと「やうに」でかかる繊細さをどう読むかは、難しい。「やうな」のように直接「夜」を修飾してはいない。「錆びついた箱の中には」から、まるまる比喩であるならば、すべて「夜」が回収するが、そうでなければ、「錆びついた箱の中には」が、回収する可能性がある。錆びついた箱の中には、サイダーのこぼれた跡のように夜が広がっているのだ。どちらがよいか。あるいは二つながらによいのかもしれない。最後はそれが心象に転じて、茫々とした寂しさを湛えている。

「左右均しく」は羽化の姿そのままだが、敢えてこのように言うのには「作者」の驚きが感じられる。蝉や蜻蛉の羽化は、子どもの頃には目の離せないできごとだった。羽がのび、尾が伸びてゆくのに見飽きなかった。しわくちゃだった羽が同じようにピンと伸びてゆく。幼い子どもの好奇心が、当たり前のことを当たり前とせずに、体得してゆく。それを描いている。当たり前のことが、新鮮な驚きだった時代が誰にもある。

睦月雪花（愛知県）

石垣の影は濃くなり
真夏日の帰路に
思い出ばかり散らばる

うたた（京都府）

夏の日盛りに帰路につく。これが常の帰路につく時間か、今日が特別な帰路なのかは不明。その心の中には「思い出ばかり散らばる」のである。この回顧的な自画像は、現実逃避的だ。思い出に浸るしかない帰路の不如意を、夏の強い光までもがむち打ちのように輝いている。

レポートを書くとき
なぜか思い出す
君の頭が近かった頃

かつての受験生は、放課後の学習場所をどこに確保するかが課題だった。学校の図書館や町の図書館の学習

室などが最もポピュラーだが、人知れぬ場所を探して潜り込む者もいた。受験が終わって、秘密の学習場所をあかすという具合だった。基本的に受験勉強は一人でするものだったからだ。しかし、あるときから、気心の知れた者同士で集まってするのがポピュラーになった。場所も、ファストフード店やコーヒー店など、皆から見える場所に変わった。少し雑音があり、仲間の視線がある方が集中できるということらしかった。「君の頭が近かった頃」は、この受験勉強の場面だろう。向かい合ったか並んだか、ともあれ頭を並べて勉強したころだ。「レポートを書くとき」は、大学の課題レポートだろう。いまは、別々の進路を選択している。一人で書くレポートに、受験勉強と学友が懐かしく甦る。

三時（東京都）

初夏を背に君はいつでも正しくて会うたびめくるめくト長調

「君」は友人か恋人か。いつも眩しい存在である。「わたし」と「君」の関係性は、栗木京子の「観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生」を思わせる。あるいは、みつはしちかこの『小さな恋のものがたり』のチッチとサリーの世界観を連想する。不釣り合いに見える「君」との精一杯の恋である。ここでの「君」も、初夏の光りを背に輝き、行動判断を誤ることのない完璧な人格に感じられている。その印象を、爽やかで明るい「めくるめくト長調」で総括する。

星谷麦（東京都）

油絵のように二人を黙りたい
圧倒的な夕暮れのなか

「二人を黙りたい」の「を」の使い方が目を惹く。二人でいる。でも、話などしない。黙することで、二人でいることを感じていたいのだ。「圧倒的な夕暮れのなか」で、二人は同じように油絵のように赤く染まっているのだから。

太田葵（奈良県）

薄桃の肌をさわいで咬む蟻に
掻き分けられる脛の剛毛

「薄桃の肌」は、どう見ても女性的だ。「さわいで咬む

蟻」は、意外な展開だが、官能性は高まる。「掻き分けられる脛」。はて？「の剛毛」。はてはて？これはどう見ても男でしょう。作者に読みをからかわれているような展開。思わず笑ってしまう。

白戸灯（青森県）

よく知った夜をサンダルで歩く

「よく知った夜」とは、時間、街並みなど生活の中で通常の生活スタイルの中におさまる時間、空間をさすのだろう。だから、普段履きのサンダルを選んで歩く。散歩か、近くの居酒屋か。「サンダル」が、「よく知った夜」を具体化している。

龍　秀美　選

由良鴻波（東京都）

キリンの長い
首を折ると象になるように
人々に足並みを揃えた

キリンの首を折ると象になるわけもないが、「人々」が「なる」と言えばなるのだろう。「短い」首の象と「長い」首のキリンでさえも交代する。そういう不可解な時代が見えている。

神澤保仁（神奈川県）

土地区画整理事業を噛む首長
もうみどりクレヨンありません

首長が計画すれば緑地帯ができるが、それをイメージ化するみどりのクレヨンがなければ計画図はできない。「噛む・噛み砕く」という具体的な活動と「みどりクレヨン」というビジョンによる実現性の大切さ。

山田やまめ（千葉県）

養花天
不安になると脈拍を確かめる癖
治らないまま

「養花天」という言葉の発見がまず良い。「雲が花を育てる」という伝統的な季語と現代の不安がマッチする。

川瀬十萠子（茨城県）

清濁は均等であれば美しく
その中心の赤いサルビア

一部の品種には毒性を持つものもあると言われるサルビアの花。清濁併せ呑むには赤く燃えるような強い精神性が要るのだろう。

松浦やも（東京都）

散文のガーベラだからかわいそう

桜やバラなどには詩的で象徴的な意味がつきまとう。

それに比べると大衆的であることに自足させられるガーベラ。しかし、散文の持つ圧倒的な存在感は「かわいそう」なのかどうか。

バナナ剥かない方の片手に垂れる皮

春蜜柑（群馬県）

片方の手に持って、もう片方の手で剝くと、当然「剝かない方」の手だけに垂れるバナナの皮。動作を発見する目が面白い。もし片手でなければどういう動作になるだろうと考えてしまう。

なかむらそう（長野県）

あたらしい
耳のつかいかたを教わって
アイリスこんな音で枯れるの

蓮は咲くとき音がするというが、この世の花はみんな聞こえない音を出しているのかも知れない。植物の声が聞こえる新しい耳があれば地球はもっと良くなるだろう。

あおのしろ（神奈川県）

ベビーカーをおす女
宇宙の音がする車
アスリートみたいで好きじゃない

子育て中のママの動作は最大タイムパフォーマンスを目指す。ベビーカーと宇宙とアスリートの最強トリオの組み合わせが面白い。

羊夏生（東京都）

わたくしの中には誰も居ませんと人型ＡＩの言うわたくし

一応「人型」なので「わたくし」だが、物理的には「誰も居ません」なのか。ＡＩは何人称なのだろうという疑問が湧く。「俺」とか「自分」とか、相手によって変わるのだろうか。

仲原礼（東京都）

落雷にむしろ苦しみたいか木々

落雷に一瞬照らされる木々が身じろぎもせず立っている姿は、運命として、今いる場所を決められているものの姿。打たれても苦しみに耐え、むしろ成長の契機とする覚悟を思わせる。

口語詩句投稿サイト 72h
www.kougoshiku-toukou.com

ことばの力詩集

２０２６年９月　第71号
掲載作品　2026年７月投稿分

発行日　2026年９月１日
発行　公益財団法人佐々木泰樹育英会
東京都中央区明石町８-1　聖路加タワー40階
TEL.03-6278-5595　FAX.03-6278-5591

「ことばの力詩集」の命名は、榎本了壱氏によるものです
編集・デザイン＝アタマトテ・インターナショナル
AD＝榎本了壱　D＝坂口真理子
印刷・製本＝株式会社グラフィック
ISBN 978-4-910485-78-2

佐々木泰樹育英会の口語詩句事業

【第8回口語詩句賞】

賞の種類と賞金

大賞（原則1名）100万円　奨励賞（若干名）10万円

スケジュール

投　稿　期　間：2026年2月1日～2027年1月31日
選　考　期　間：2027年2月1日～3月5日
選考結果開示日：2027年3月18日
授　　賞　　式：2027年3月29日

【2027年度 口語詩句奨学金概要】

区分と給付額

中学生6万円　高校生12万円　大学生（大学院生含む）60万円

スケジュール

投　稿　期　間：2026年2月1日～2027年1月31日
選　考　期　間：2027年2月1日～3月5日
採用書類提出締切日：2027年3月12日
選考結果開示日：2027年3月19日
奨学金給付通知書授与式：2027年3月29日

※最新情報は本財団ホームページでご確認ください
https://sasakitaijuikueikai.or.jp/

後援

一般社団法人現代俳句協会
株式会社思潮社 現代詩手帖編集部

発行　公益財団法人佐々木泰樹育英会